

ジョン・ウェスレーの確証の教理についての一考察 — A Study on the Doctrine of Assurance by John Wesley —

中村 謙一

I 救いの確証と神の霊の証し

1. 直接的な証し

確証の教理を基礎として作成されたジョン・ウェスレーの標準説教は三つある。それらは、説教 10「御霊の証し I」(1746 年)、説教 11「御霊の証し II」(1767 年)、説教 12「私たち自身の霊の証し」(1746 年)である¹。確証の教理を説明するために説教 10 と説教 11 の中でウェスレーが用いた聖書の箇所は使徒パウロのローマの信徒への手紙 8 章 16 節であり、新共同訳によると次のような聖句であった。「この霊こそは、私たちが神の子供であることを、私たちの霊と一緒に証しして下さいます」。ウェスレーの 16 節のギリシア語訳は、「同じ御霊が、私たちが神の子どもであることを私たちの霊に証しして下さる。」であり、むしろこの箇所は、神の霊の証しについてだけ語っていると解釈してもおかしくないと、ウェスレーは主張している²。「同じ霊」とは、15 節で説明されているように、「アッパ、父よ!」と呼ばせ、

私たちを神の子とする養子の霊 (**the Spirit of adoption**)、つまり聖霊のことを意味するとウェスレーは理解していた³。ウェスレーは、自らが 1755 年に出版した「新約聖書註解・下」の中でも、ローマの信徒への手紙 8 章 16 節を「信者自身の霊からの証しとも、また善い良心からの証しとも明白に異なる証しをもって、すべての偽りなき信者の霊とともに、これを絶えず明白に喜び受ける者は幸いである。」と註解し、「神の霊の証し」の存在と、それを待ち望むことの大切さをメソジストたちに訴えていた⁴。

新共同訳の「一緒になって証しして下さいます」という表現は「二つの霊による共同の証し」について述べているのではないかということ十分に示唆している。ウェスレーは 16 節のギリシア語訳についてさらに次のような詳細なコメントを説教 10 の中で加えている。「しかし私は反論しません。なぜなら、その他多くの御言葉を理解しているので、つまり、全ての真のクリスチャンの体験と共に、彼が神の子どもであることの彼自身の証しと神の霊の証しの両方がすべての信者の中に存在することについて、十分な証拠があるからです」⁵。ウェスレーによれば、二つの霊の証しとは、「神の霊の証し」と「私たちの霊の証し」ということになり、この共同の証し (**a joint testimony**)⁶を信者は内に持っている、としているのである。

ローマの信徒への手紙 8 章 16 節中のギリシア語、「スマルトウレイ」(**witnesses with** : 一緒に証言する、共に証しする)⁷の「スン」(一緒に、同時に)⁸という前置詞については、聖霊が私たちの霊に証しをするのと、聖霊が私たちに「アバ、父よ!」と叫ぶことがほぼ同時であることを示している、とウェスレーは解釈している⁹。この同時性は神の霊の証しが瞬間的なものであることを示唆していると思われる。しかし、スマルトウレイ(ス

³ *ibid.*, Outler, pp.270–71.

⁴ ジョン・ウェスレー、『ウェスレー著作集 第二巻、新約聖書註解・下』、松本卓夫・草間信雄訳、新教出版社、1979 年、39 頁

⁵ *ibid.*, Outler, Sermon 10, pp.270–71.

⁶ *ibid.*, Outler, Sermon 11, p.295.

⁷ 古川晴風、『ギリシア語辞典』、大学書林 1988 年、1032 頁

⁸ 前掲書、1038 頁

⁹ *ibid.*, Outler, Sermon 10, pp.270–71.

¹ ウェスレーの標準説教の順番は、Frank Baker と Albert C. Outler が編した *The Works of John Wesley, Volume I, Sermon I*, Nashville, Abingdon Press, 1984 に従う。

² Albert C. Outler, *The Works of John Wesley, Volume I, Sermon 10 “The Witness of the Spirit I,”* Nashville, Abingdon Press 1984, p.274.

マルトウレオの三人称・単数・現在形、「共に証しする」¹⁰のギリシア語の意味は、どのように神の霊の証しが人間に認識されるのかを明白には解明していない。共同の証しがクリスチャンの良心などの聖霊の実である間接的な証しだけを通して人間に認識されるのなら、それはカルヴァン派やピューリタンの神学の解釈に近づく。積義上はそのようにも解釈できる、ということウエスレーは知っていたと思われる。しかしウエスレーは共同の証しは、聖霊によって目覚められた人間の持つ霊的な諸感覚によって認識可能¹¹な二つの証しとして解釈するのである。すると、神の霊の証しの方の説明には困難が伴うことは必然であったであろう。

「神の深み」(1 コリント 2: 10) について説明する人間の言葉を発見するのは困難であると¹²、ウエスレーが言うように、「神の霊の証し」についての説明は難しい。しかし、およそ次のような表現が妥当ではないかとウエスレーは言っている。それは、「御霊の証しとは、魂における内的印象であり、それによって神の霊が直接に私の霊に、私が神の子どもであり、イエス・キリストが私を愛していたことを、私のために御自身をお与えになっていたことを、私のすべての罪が消され、私、この私ですら神と和解していたということを、証しされることです」¹³。これがウエスレーの受けた「神の霊の証し」である。「私、この私ですら」という表現によって、この証しがアルダスゲイト体験の証しと関係が深いことが判る。又、ウエスレーによると、神の霊の証しは、直接的に内的に私たちの魂に印象されるもの (**an inward impression on the soul**)¹⁴ である。

聖書的根拠に基づくウエスレーの「神の霊の証し」の説明は、「証し (マルトウリア)」のギリシア語の意味である「記録 (**the record**)」や「証言 (**the testimony**)」を用いる。神の霊の証しとは、神が私たちに永遠の命を与えた、その永遠の命は神の子の中にある、ということの記録であり、それは神が霊的に感化したすべての書物 (これは恐らく聖書を意味しているであろう

う) の中で証ししていることの要約、つまりは証言である、とウエスレーは解釈している¹⁵。「の証言は、私たちの霊と共に、私たちの霊へ与えられた神の霊によってなされるものである。神は証しをなさる御人格であられるのである。この神が私たちに証しすることは、私たちが神の子どもでもある、ということなのである」と、ウエスレーは説明し、神御自身の御人格こそが証しの源泉であることを聖書を根拠にして主張している¹⁶。

さて、ガラテヤの信徒の手紙 4 章 5 節から 7 節は次のような聖句である。「それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。あなたがたが子であることは、神が「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。(新共同訳)」これはローマの信徒への手紙 8 章 16 節とその内容が深く関係していることで知られる箇所である。ウエスレーは、この箇所に注意を向けながら、ローマの信徒への手紙 8 章 16 節を、「これは、議論や思慮の結果からではなく、何か瞬時的で直接的なものによるのではないだろうか。この霊は、わたしたちの心の中で、私たちが誠実に行ういかなる思慮の結果の前に、それが私たちに与えられた瞬間に、「アバ、父よ」と叫ばないだろうか？ だからこれらの聖句はすべて、最も明白な意味において、神の霊の直接的な証しを説明したものなのである。」と解釈している¹⁷。

このように「神の霊の証し」は、直接的に、そして瞬間的に「私たちの霊」へ証しされることをウエスレーは意味していた。そしてこの直接性こそは、人間ではなく、神が聖霊を通して主導を取っておられることをはっきりと示しており、ウエスレーの確証の教理の最も重要な特色となっている。それは「神主導の教理である」ということなのである。

¹⁰ 前掲注 (9) 書、1032 頁

¹¹ *ibid.*, Outler, Sermon 10, "The Witness of the Spirit I," p.282.

¹² *ibid.*, Outler, Sermon 10, p.274.

¹³ *ibid.*

¹⁴ *ibid.*, Outler, Sermon 11, p.287.

¹⁵ *ibid.*, Outler, Sermon 11, p.286.

¹⁶ *ibid.*

¹⁷ Arthur S. Yates, *The Doctrine of Assurance*, London and Southampton, The Epworth Press, 1952, p.113.

2. 全てに先立つ神の愛と新生

ウエスレーは、「神の霊の証し」において、神の愛が私たちの魂に注がれることがクリスチャンの義認・新生・聖化体験の中ですべてに先立つ神の行為であると位置づけている。その理由は、ヨハネの手紙第一の4章19節で「私たちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです」と記されているように、御霊が私たちの霊に神の愛を証ししてくれるまで、私たちは神の赦しの愛を真に知ることはできない、とウエスレーは信じていたからである¹⁸。彼は「人間の理性と宗教への誠実なる訴え (1743年)」という論文の中で、次のように言っている。「それでは、あなたはどのようにして初め神を愛すようになったのか。それは、神があなたを愛して下さったということ、あなたが知ったからではなかったか。神が恵み深く、罪人であるあなたに憐み深いということ、あなたが味わい、見るまで、あなたは一体神を愛したか、愛することができたか」¹⁹。このように神が最初に私たちを愛さなければ、私たちは神を愛することはできない、とウエスレーは理解していた。「神の霊の証し」は、私たちの神への愛に先行し、さらに神の愛が生み出す全ての聖潔にも先立ち、従って「私たちの霊の証し」に先立っている、とウエスレーは主張していた²⁰。新生は私たちが神の子どもとされたことの証しに先立つべきこととして理解されている²¹。ウエスレーは、心も生活も聖いと私たちが自覚する以前に、まず自分が実際にそうでなければならぬ、つまり、内も外も聖いという「私たちの霊の証し」を私たちが持つ以前に、私たちが神から生まれるという極めて大きな力強い変化が起こることを指摘しているのである²²。そこでは「神の霊」、聖霊による神の愛の注ぎが新生の原動力なのであり、それは使徒言行録26章18節が記すように、「サタン力から神の力へ」、「暗闇から光に」、「彼らの目が開かれる」というほどの

大きな変化が人間の内に起こることをウエスレーは意味していた²³。このように、直接的証しは新生を生み出す源泉なのであり、神が人間を造り変える行為なのである。

ウエスレーは、説教18「新生のしるし」(1748年)の中で、新生のしるしとは、信仰、希望、神と隣人への愛であると言っている²⁴。そしてこれら3つのしるしとその人に見出すことができるのなら、その人は新生していることが判るのだ、ということをも指摘している²⁵。ウエスレーにとって、新生は聖化への門であり、入り口であり、聖化全体ではないが一部分ではあり²⁶、全き完全(perfection)へ続く道なのである²⁷。ウエスレーはこの新生による変化を、私たちの内(in us)で神が働くことによって起こる実質的な変化(a real change)と呼び、一方で義認を、私たちのために(for us)神が義認の行為をして下さることによって起こる関係的变化(a relative change)と呼んで両者を区別しているが²⁸、実質的には義認と新生はほぼ同時に起こるものとして理解し、理論上は義認が新生よりも先に起こるものとして説明しているにすぎない²⁹。神の霊の証し(直接的な証し)は聖霊を通した神の愛の注ぎを私たちの魂へ起こし、私たちが内から新生させ、聖化させるのだ、というウエスレーの主張がこの節で明らかとなったと思う。このように、直接的な証しは新生と聖化と深い関係を持っているのである³⁰。

3. 義認的性格

ウエスレーは、説教11「霊の証しII」(1767年)の中でローマの信徒への

²³ *ibid.*, Outler, p.279.

²⁴ *ibid.*, Outler, Sermon 18, "The Marks of the New Birth," p.417, 422, 425.

²⁵ *ibid.*, Outler, Sermon 45, "The New Birth," p.198.

²⁶ *ibid.*

²⁷ William R. Cannon, *The Theology of John Wesley*, Lanham MD, University Press of America, 1974, p.125

²⁸ *ibid.*, Outler, Sermon 19, "The Great Privilege of those that are born of God," pp.431-432.

²⁹ *ibid.*, p.431.

³⁰

¹⁸ Albert C. Outler, *The Works of John Wesley, Volume I, Sermon 10 "The Witness of the Spirit I,"* Nashville, Abingdon Press, 1984, p.274.

¹⁹ 野呂芳男訳、H・リントシュトレーム、『ウエスレーと聖化』、新教出版、1989年、304頁

²⁰ *ibid.*, Outler, p.275.

²¹ *ibid.*, Outler, p.274.

²² *ibid.*

手紙の 3 章 24 節「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」³¹をあげ、キリストの十字架の贖いによって罪人を赦す、義認的性格を持っている直接的神の霊の証しが神の子供たちへ与えられることを強調している。ところで、記述にかなりの時間をかけ、後に出版された日誌の中で、アルダスゲイト体験の本人の証しは次のようなものであった。「9 時 15 分前頃、彼がキリストにおける信仰を通して神が心の中で働かれる変化について説明しているその時、私は私の心が不思議と暖まるのを感じた。私は、私が救いのためにキリストに、キリストだけに信頼した、と感じた。そして、彼が私の、この私の罪ですら取り去って下さり、そして私を罪と死の律法から救ってくださった、という確証（又は確信）が私に与えられた」³²。

「救いのためにキリストにだけ信頼した（ **I did trust in Christ alone for salvation** ）」、「キリストが私の罪を取り去ってくださった（ **he had taken away my sins** ）」、そして「私を罪と死の律法から救って下さった（ **saved me from the law of sin and death** ）」というウエスレーの証しの中には、認罪と悔い改め、信仰による罪の赦しと和解を受けて救われた、一人の罪人の喜びに満ちた、神による義認体験が表現されていないだろうか。「感じた（ **I felt** ）」という表現の繰り返しと「救ってくださった（ **saved me** ）」と「確証（あるいは確信）が与えられた（ **an assurance was given me** ）」という表現は、救いの確証が義認の信仰を通して与えられたことを示していると十分に推測できるのではないだろうか。「私の心が不思議と暖まるのを感じた」という表現には、そこでウエスレーが受けた証しが霊的でしかも直接的なものであったことを示唆しており、義認的性格を持った神の霊の証しがウエスレーの霊に証しをされたその瞬間であったことを意味していないであろうか。

ウエスレーのアルダスゲイト体験は、17・18 世紀に盛んであったドイツ敬虔主義を受け継ぐルター派教会のモラヴィア兄弟団のピーター・ベラー牧師の影響の下で起こったものであった³³。その点においてウエスレーの義認体

験は極めてプロテスタント的な義認と新生を強調するドイツ敬虔主義の伝統に根ざしていた。それは、人は恵みを通して信仰によってのみ救われる（エフェソ 2:8）、というプロテスタントの信仰義認の教えを中心とする教理であり、実は国教会の中にもトマス・克蘭マーによって受け継がれていたものであった。ウエスレーはそれを体験的に新しい教理として再発見したことになるのである。

ウィリアム・ラグスデール・キャンノンによると、ウエスレーはこの宗教改革の中心的教理から生涯変わることがなかった³⁴。ウエスレーは召天する 1 年前の 1790 年 3 月 26 日の説教 127「その婚礼の礼服を着て（ **On the Wedding Garment** ）」の中で次のように言っていたことがキャンノンによって指摘されている³⁵。「およそ 50 年程前、私は信仰による義認の教理についての明白な考えをもった。そしてこの教理の中にあつて、そのとき以来、私は決して変わらなかった。決して！髪の毛一本の幅ほどにも（変わらなかった）！」³⁶ キャンンは、ウエスレーとカルヴィニズムは共に信仰義認の教理において互いに似ていた、と主張している研究家であった³⁷。ジョージ・クロフト・セルも、「ルター・カルヴァンの信仰による救いと罪の教理から、ウエスレーは髪の毛一本の幅ほどにも逸脱することはなかった。」と、キャンノンと同様な点を指摘している³⁸。

「私は、私が救いのためにキリストのみに信頼したのを感じた。（ **I felt I did trust in Christ, Christ alone for salvation.** ））」というウエスレーのアルダスゲイト体験における証しの義認的な内容は、キャンノンとセルの主張の正しさを示していると思われる。それは確かに、義認的性格を持つ直接的な証しを通して、キリストへの信仰のみによる救いをウエスレーが与えられた瞬間であった、と解釈できるとと思われる。このように、オリジナルのアルダスゲイト体験においては、義認と救いの確証の相関関係は非常に深い。それらはほ

³⁴ *ibid.*, Cannon, p.81–82.

³⁵ *ibid.*, Cannon, p.82.

³⁶ *ibid.*

³⁷ *ibid.*, Cannon, p.82.

³⁸ George Croft Cell, *The Rediscovery of John Wesley*, Lanham MD, University Press of America 1935, p.362.

³¹ *ibid.*, Outler, Sermon 11, “The Witness of the Spirit II”, p.294.

³² Thomas Jackson, *The Works of the Rev. John Wesley, A.M.*, Volume I, London, Mason 1829–31, p.103.

³³ 小林謙一、『ドイツ敬虔主義』、教文館 1992 年、18–19 頁

ば同時的、不可分的に起こった、といってもよい。

4. ウエスレーの確証の教理の源泉

ウエスレーの確証の教理にもっとも大きな影響を与えたのは、ドイツ敬虔主義を受け継ぐルター派教会のモラヴィア兄弟団のピーター・ベラー牧師であった。アルダスゲイト体験の直前にウエスレーはモラヴィア派のピーター・ベラー牧師から **1738年2月7日** から **5月4日** までの **3ヶ月** の間に **13回** の霊的な指導（あるいは影響）を受けていた³⁹。その **13回** の会合の日付け（確認できるもの）はウエスレーの日記によると下記の通りである⁴⁰。

- 1回目→**1738年、2月7日**、火曜日。ベラーと初めて会う。記念すべき日。
- 2回目→**1738年、2月17日**、金曜日。ベラーと **Oxford** へ行く。
- 3回目→同年、**2月18日**、土曜日。ベラーと **Stanton Harcourt** へ行く。
- 4回目→同年、**2月19日**、日曜日。宣教先（**the Castle in Oxford**）にベラーも同行。「兄弟、兄弟。そのようなあなたの哲学（理屈）は追放されなければならない。」と言われ、ウエスレーはベラーを理解できない時があった。
- 5回目→同年、**3月4日**、土曜日。チャールズをベラーと共に見舞う。
- 6回目→同年、**3月5日**、日曜日。ベラーによって、義認の信仰を求める必要に気がつかされる。
- 7回目→同年、**3月23日**、木曜日。ベラーと会って、生きた信仰の実（聖化と幸福）について話す。ますますベラーに感銘を受ける。
- 8回目→同年、**4月22日**、土曜日。ベラーが話す生きた信仰が聖化の実を生

³⁹ Arthur S. Yates, *The Doctrine of Assurance With special Reference to John Wesley, London and Southampton, The Epworth Press 1952, p.24, 30.* 詳細に吟味をすれば、**1738年5月4日** にウエスレーがベラーを実際に見送ったかどうかは定かではない。見送っていないとすると、ウエスレーとベラーの会見は **13回** ではなくて **12回**、となるであろう。

⁴⁰ W. Reginald Ward and Richard P. Heitzenrater, *The Works of John Wesley, Volume 18, Journals and Diaries I (1735-1738), pp.223-237.*

み出すことに納得するが、信仰授与の瞬時性に疑問を持つ。

- 9回目→同年、**4月23日**、日曜日。瞬時性への疑問が、ベラーの連れて来た **2-3人** の証人の生きた証しによって、取り去られた。（確証の教理の誕生）「主よ、不信仰な私をお助け下さい！」と記す。再度、ベラーに教え続けることが適当かどうか相談する。「教えるのを止めてはいけない。神が与えた賜物を絶対に隠してはいけない。」と、ベラーが悩むウエスレーにアドバイスをする。
- 10回目→同年、**4月26日**、水曜日。ベラーと歩きながら話す。「神の恵みに足りないままでいてはいけない」救いの確証を求め続けることの大切さについてベラーに励まされる。
- 11回目→同年、**5月1日**、月曜日。**Fetter Lane** をベラーのアドバイスも聞きながら結成する。
- 12回目→同年、**5月3日**、水曜日。チャールズと共にベラーと会う。救いの信仰を祈り求めていくことを兄弟共に確信する。
- 13回目→同年、**5月4日**、木曜日。ベラーとの別れ。（**Carolina** へ）

ウエスレーの確証の教理の源泉はこの最低 **13回** のベラーとの交わりにあったのではないか。なぜならその交わりの中で、ウエスレーは義認的信仰による救いの確証を瞬間的な個人体験として求めていく、ということを確認したからである。アルダスゲイト体験の種をまいたのはベラーであったのではないか。

ウエスレーがベラーと初めて出会った、日記の中の **1738年2月7日**（第1回目）の記録を見ると、日付のすぐ後のカッコ内において次のような言葉が記されている。（**A day much to be remembered.** : 記憶によく留めておくべき日）⁴¹ ウエスレーにとってベラーと初めて出会った日は何か特別な意味を持っていた。その日ウエスレーは、オランダ商人ウエイナンツの家でドイツからロンドンへ着いたばかりの **3人** の男に出会った⁴²。ウエスレーは当時自分が住んでいた友人のハットン家の近くにこの **3人** の仮住まいを紹介し、

⁴¹ *ibid.*, Jackson, p.84.

⁴² *ibid.*

3人との交わりが始まった⁴³。その3人の内の1人がモラヴィア兄弟団の牧師のピーター・ベラーであった。

1738年の3月4日(土)と5日(日)(第5回と第6回目の会合)は、ウエスレーにとって非常に重要な日々であった。ウエスレーは次のように記している。「ベラーによって、私は信仰の不在と信仰によってのみ私たちが救われるところのあの信仰への望みにはっきりと納得した」⁴⁴。ベラーとの交わりによって、ウエスレーは自分が不信仰であったことに気がつき、信仰によってのみ私たちは救われる、という宗教改革以来のプロテスタントの信仰義認の教理に心から納得し、そのような救いの信仰が自分にとって求めるべきものであることに確信した日が5日の日曜日であった⁴⁵。ウエスレーはこの新しい教理を翌日3月6日から刑務所の死刑囚に対して初めて教え始めた⁴⁶。

4月23日(日)(第9回目)は、ウエスレーの確証の教理が生まれた日である。ウエスレーは前日の22日(土)(第8回目)に疑問になっていた、救いの確証を伴う義認の信仰が瞬時に与えられることについて、ベラーと共に他の信徒の証しを検証することによって、神にはそのようなことが可能であることを確信した。22日(土)の段階ではウエスレーは、「しかし、私はベラーが話した瞬間的な御業について理解できなかった。私は、どのようにしてこの信仰が瞬間の中で与えられなければならないか理解できなかった。どのようにして人は、闇から光へ、罪と悲しみから聖霊にある義と喜びへ瞬間的に変えられることができるのか。」と言って悩んでいた⁴⁷。パウロやペテロなどの使徒が活躍した新約の時代ならまだしも、ウエスレーの時代においても瞬間的な回心が可能であるのかどうかウエスレーはこの時点で信じられなかったのである⁴⁸。

ところが翌日の4月23日(日)の日記には次のようなことが記されている。「闇から光へ、罪と恐れから聖潔と幸福へと変える、御子の血における信

仰を瞬時に彼ら自身の中に神が与えられた2～3人の生きた証しという一致した証拠によって、私は退却して打ち負かされた。私の論争もここで終わった。私はただ主よ、不信仰な私をお助け下さい、と叫ぶだけである」⁴⁹。この日記から言えることは、ベラーが連れてきた信徒の証しを聞いて、ウエスレーはベラーの教理の正当性を受け入れた、ということである。神が人に義認の性格を持つ神の霊の直接的な証しを瞬時に与えることができる、というウエスレーの確証の教理の重要な中心点である瞬時性が、この日にウエスレー自身によって確信されたといえると思われる。

救いの確証の瞬時性がなければ、アルダスゲイト体験はなかったのではないか。ウエスレーは1738年5月24日の8時45分頃という、極めて特定された時間の中において、「心が不思議に暖められる」のを感じた、と記しているのである。それが直接的な神の霊の証しがウエスレーの霊に証しをした瞬間なのであったと解釈できる。瞬時性はそれが起こった瞬間をほぼ特定できることを示している。だから現在私たちはアルダスゲイト体験の年月日を知ることができるのである。23日(日)にウエスレーはアルダスゲイト体験の最終的な準備が出来上がった。この日にウエスレーは、はっきりと自分が待望すべきものを知った。救いの確証は義認の信仰と共に瞬間的に与えられる。あとはそれが与えられるのをウエスレーは待つだけであった。アルダスゲイト体験への準備が完了したという意味において、1738年4月23日(日)はウエスレーの確証の教理が生まれた記念すべき日である。それはアルダスゲイト体験の約1ヶ月前であった。

ベラーはウエスレーのアルダスゲイト体験以前の5月4日にロンドンを去った。ウエスレーはベラーの働きについて感慨を込めて次のように日記に記した。「ピーター・ベラーはロンドンを去った、キャロライナ植民地へ船出するために。ベラーが英国に着いて以来、ああ何という御業を神はなされてきたことであろうか！ そのような御業は天と地が終わるまで決して終わることはないであろう」⁵⁰。ベラーはウエスレー兄弟のことを祈りに覚えつつ去った。その後チャールズ・ウエスレーは肋膜炎を患い友人ブレイ氏の家で床

⁴³ *ibid.*, Jackson, p.84.

⁴⁴ *ibid.*

⁴⁵ *ibid.*, Jackson, p.84.

⁴⁶ *ibid.*

⁴⁷ *ibid.*, Jackson, p.91.

⁴⁸ *ibid.*

⁴⁹ *ibid.*, Jackson, p.91.

⁵⁰ *ibid.*, Jackson, p.93.

に伏していた時、聖霊降臨際であった **1738年5月21日**（日）に義認の信仰を得て救いの確証が与えられた⁵¹。ジョン・ウェスレーは、同年 **5月24日**（水）にアルダスゲイト街の「会」という集会でルターの「ロマ書の序文」を聞いている時に、義認的な救いの確証を遂に得ることができたのであった⁵²。このようにウェスレーの確証の教理の源泉において、神によって用いられ、最も重要な役割を果たしたのは、若きモラビア派の牧師・ピーター・ペラーであった。

5. 救いの確証と私たちの霊の証し（間接的証し）

「私たちの霊の証し」とは何であろうか。ウェスレーによると「私たちの霊の証し」とは、直接的な「神の霊の証し」(**The Direct Witness**)によって私たちの内外に生み出された私たちの聖なる気質、つまり聖霊の実、聖化の実であり、それは直接的証しに対して間接的証し(**The Indirect Witness**)と呼ばれているものである⁵³。

ウェスレーは、説教 **10**「御霊の証し (I)」(**1746年**)の中で、神の霊が「聖霊の実」として生み出す間接的証しについて次のように説明している。「心の中を支配する聖霊の内的な実とは、愛（神への愛と隣人愛）、喜び、平安（ガラテヤ **5:22**）、慈愛、謙遜、柔和、寛容、忍耐（コロサイ **3:12, 13**)である」⁵⁴。この他にウェスレーは、悔い改め、信仰、希望も聖霊の実に加えている⁵⁵。これら聖霊の実の存在は、つまり、「私たちの霊の証し」の存在自体は、そのクリスチャンが神の子どもであることを証しているのであると、ウェスレーは指摘している⁵⁶。ウェスレーによると、聖書に記されて

いる神の子供たちの聖化の特徴を自分自身に当てはめてみるなら、誰でも自分が神の子どもであるかどうかを判別でき、信仰を確証によって強めることができるというのである⁵⁷。聖句を通して、間接的証しが直接的証しを確認し、また直接的証しは間接的証しを確認するのである⁵⁸。そのようにして、共同の証しは互いに支え合うのである。

ウェスレーは聖書の御言葉を根拠とすることによって共同の証しの体験を規定している。それは、直接的証しと間接的証しの体験が熱狂主義や主観主義に走らないように舵を取るためでもあった⁵⁹。ウェスレーの確証の教理は、聖書と経験が一つとなっているが、ウェスレーは経験だけでは不十分であると考えていた⁶⁰。ウェスレーのプロテスタント的な聖書中心主義がここに現れている、といえる。ウェスレーは、聖書の御言葉に基礎づけられていない、たった一つの教義を証明することですらも、経験だけでは不十分であるとし、このことは疑う余地のない重要な真理として受け止めていた⁶¹。このようにウェスレーの確証の教理は、聖書に基礎を置いて自己検証が可能な極めて実験的な教えなのである。

ウェスレーは間接的な証しの状態だけに安息せずに、信徒は神の霊の証し（直接的な証し）を継続的に求め、神の子どもの信仰者となることを勧めている。信徒が直接的な証しなしで聖霊の実の中で安息させないように、と注意を呼びかけているのである⁶²。直接的な証しのない聖霊の実（実のように見えるもので、試食のような聖霊の実のこと）は先行の恵みによるものであるかもしれず、それはさらなる神の霊の証しに導かれた共同の証しがまだ必要なことをウェスレーは説いている⁶³。ウェスレーは説教 **11**の中で次のように言っている。「しかし決してそこで留まることを勧めない。もしも留まるなら私たちの魂を危険にさらすことになる。もしも私たちが賢明なら、神の霊が私たちの心の中で「アバ、父よ！」と叫ぶまで、私たちは継続

⁵¹ ジョン・テルフォード著、『ジョン・ウェスレーの生涯』、深町正信訳、ヨルダン社 **1988年**、**60** 頁

⁵² 前掲書 **60** 頁

⁵³ Frank Baker/Albert C. Outler, **The Works of John Wesley, Volume 1, Sermons I, Sermon 10, "The Witness of the Spirit I,"** Nashville, Abingdon Press, **1984**, p.283.

⁵⁴ **ibid.**

⁵⁵ **ibid.**, Baker, Sermon 18, "The Marks of the New Birth," p.412.

⁵⁶ **ibid.**, Baker, Sermon 10, pp.271–272.

⁵⁷ **ibid.**, Baker, Sermon 10, pp.285–286.

⁵⁸ **ibid.**, Baker, Sermon 11, pp.295–296.

⁵⁹ **ibid.**, Baker, Sermon 10, p.269.

⁶⁰ **ibid.**, Baker, Sermon 11, p.293.

⁶¹ **ibid.**

⁶² **ibid.**, Baker, Sermon 11, p.298.

⁶³ **ibid.**

的に神に向かって叫ぶであろう。これこそが全ての神の子どもに与えられた特権であり、これなしでは、私たちは決して神の子供であることを確証されることはない⁶⁴。このように間接的な証しだけが重要なのではなく、それを生み出す直接的な証しを含めて、共同の証しとして祈り求めていく姿勢が、信仰生活の中で勧められているのである。

II. 確証の教理の発展

1. 赦しの感覚と義認の信仰

ウエスレーが、アルダスゲイト体験前後に義認の信仰と体験的・感覚的な要素を含む救いの確証を不可分的に起こるものとして考えていたのは、ルター派モラヴィア兄弟団の牧師であったピーター・ベラーの影響によるものである。ウエスレーはアルダスゲイト体験の後すぐにドイツへ旅立ち、モラヴィアンの本拠地ヘルンフートを訪れ、持ち前の批判精神を持ってモラヴィア派の信仰と教理に学んでいる⁶⁵。リチャード・P・ハイゼンレイターは、「偉大なる期待 (**Great Expectations: Aldersgate and the Evidences of Genuine Christianity**)」という論文の中でウエスレーにおけるモラヴィア派の神学的影響を次のように要約している。(1) 信仰だけが救いに必要である、(2) 善き業 (敬虔または慈悲) は救い以前に要求されないし、実際それは不可能である、(3) 信仰に段階はない。ただ一つの適切な信仰があるだけで、弱い信仰は信仰ではなく、むしろそれは信仰不在である、(4) 適切な信仰は瞬間的に間違いなく知られるところの信仰の確証をもたらす、(5) 信仰の確証は罪、疑い、恐れからの自由をもたらす、(6) 確証は、聖霊における完全な愛、平安、喜びを伴うだろう。(7) この確証がなければ、その人はクリスチャンではない、(8) 確証は、最終的な救いに至る堅忍をもたらす⁶⁶。この節で特に

論じるのは (4) についてであるが、1740 年の夏までにウエスレーは以下の点で上記のモラヴィア派の教理と不合意に至った、とハイゼンレイターは指摘している。(A) 信仰には段階がある、(B) 確証には段階がある、(C) 恵みの手段は確証の前に奨励されるべきである、(D) 義認は必然的に確証を結果としない、(E) 義認の確証は、必ずしも疑いや恐れからの完全な自由をもたらさないこともある、(F) 義認の確証は必ずしも十分な愛、平安、喜びをもたらさないこともある、(G) 確証は最終的な救いの確証ではない⁶⁷。本論文のこの節で扱うのは (4) と (D) についてである。それは、義認と確証の不可分性の問題である。この問題については、モラヴィア兄弟団の本拠地ヘルンフートの当時のモラヴィア派最高指導者・ツィンツェンドルフ伯爵の教えとロンドンのピーター・ベラー牧師の教えは明らかに異なることにウエスレーは早くから気がついてきた⁶⁸。ベラーと違って、ツィンツェンドルフ伯爵は義認のかかなり後で救いの確証が起こるかもしれないことをウエスレーへの 1738 年 7 月 12 日の手紙の中で認めていた⁶⁹。

ウエスレーの確証の教理の変遷については、アーサー・S・イエイツの著作である「確証の教理 (**The Doctrine of Assurance : With Special Reference to John Wesley**)」(1952 年) が非常に詳しい。イエイツは、ウエスレーが中心となって指導を始めた 1744 年 (アルダスゲイト体験から 6 年後、メソジスト・リバイバルから 5 年後) の最初のメソジスト年会の議事録の中においては、義認の信仰が、キリストのこの世との和解における神の超自然的な内的な感覚そのものとして定義されていた、と主張している⁷⁰。例えば次のような質疑が年会で話し合われていた。「質問: 信仰とは何か? 答え: 一般に信仰とは神的、超自然的、不可視的、過去の、未来的、あるいは霊的な物事の証明

pp.88-89. なお、この論文は、岩本助成氏がすでに『ウエスレー・メソジスト研究 5 ; オールダスゲイト再考』、日本ウエスレー・メソジスト学会、2004 年、教文館、15 頁、において取り上げ指摘していることである。この Heitzenrater と岩本氏の考察に同意する。

⁶⁷ *ibid.*, Heitzenrater, p.89. 前傾注 (125) 書、26 頁

⁶⁸ *ibid.*, Yates, pp.32-33.

⁶⁹ *ibid.*

⁷⁰ Arthur S. Yates, *The Doctrine of Assurance: With special Reference to John Wesley*, London and Southampton, The Epworth Press 1952, p.63.

⁶⁴ *ibid.*, Baker, p298.

⁶⁵ 前掲注 (72) 書、62 頁 ウエスレーのドイツへの旅は約 3 ヶ月間に及んだ。

⁶⁶ Richard P. Heitzenrater, "Great Expectations:Aldersgate and the Evidences of Genuine Christianity," *Aldersgate Reconsidered*(1990), chapter 3, Nashville, Kingswood Book,

であり、それは神の霊的な見解と神の事柄である。それは第一に罪人が、キリストが自分を愛し、自己を自分のために与えてくださったことを確信することである。この信仰こそがそれを罪人が得ると、その瞬間において、その信仰によってその罪人は罪を赦され義とされることである。そしてすぐに、同じ霊がその罪人をキリストの血の中で和解し罪が赦されたということを証しするのである。そしてこれこそが、その罪人の心の中に神の愛を注ぐところの救いの信仰である⁷¹。この質疑の記録の中でも明らかなように、義認の信仰を得ると「その瞬間において」、「そしてすぐに」救いの確証の証しが同時に起こるといふ、モラヴィアの側面がまだこの時点では強調されていたといえる。「同じ霊が……証しするのである」という叙述から終わりの部分までは、確証の教理の共同の証しを表現しているものであり、すべての真のクリスチャンはそのような証しを含む義認の信仰を持つことを、**1744**年の年会は認めていた⁷²。ハイゼンライターは**1740**年の夏にウエスレーはすでに義認と確証の不可分性を否定していた、と主張しているが、イエイツによれば実際にはメソジストの年会においてはウエスレーはまだ不可分性をメソジストが求めるものとして認めていたことが判る。

この議事録からも明らかなように、神の行為である義認と人間の霊的感覚に深く関わる確証体験が信仰において不可分的に発生するものと見られ、ウエスレー個人のアルダスゲイト体験の場合にはそれが当てはまるが、すべての人にはどうかという疑問が残るところなのである。しかし、この不可分性をもって、初期メソジスト運動が指導されてきたという事実も忘れてはいけないと思う。**1746**年のメソジスト年会では、その点について議論され、個人のケースを判断することは非常に困難である、なぜならすべての状況をいつも的確に個人が認識することは可能ではないからである⁷³、ということを確認している。しかし、それでもウエスレーは、誠実な求道者は究極的には聖霊による救いの確証の経験を獲得するだろうということを強調し続けた⁷⁴。

1747年の**3月25**日のジョン・スミスへの手紙では、ウエスレーは、直接的な証しが自己の魂に証しされた時、「私はそれを知覚するにちがいない」と主張し、アルダスゲイトにおける自己の確証体験を弁護していた⁷⁵。

1747年の**6月16**日のメソジスト年会において、「義認の信仰はキリストが私を愛し、私のために自らを与えてくださった、という神的な確証((確信)のことですか?」という質疑**1**に対するウエスレーたちメソジストの答えは、「私たちはそのように信じます。」であった⁷⁶。その場にはチャールズ・ウエスレーとジョン・ウエスレーの兄弟**2**人が参加していた。この時、義認の信仰が確証と同時に必然的に起こること、両者が結合していることをウエスレーは否定しなかった。ところが、**1**ヵ月半の後、ウエスレーは**1747**年**7月31**日の弟・チャールズ・ウエスレーへの手紙の中で、義認の信仰と確証を必ずしも不可分的に理解させることを認めない発言をし始めたことが、イエイツによって指摘されている⁷⁷。そして、その手紙の中で「義認の信仰は赦しの感覚そのものか?」という自問に対するウエスレーの答えは「否」である⁷⁸。

ウエスレーは、手紙の中で、義認の信仰とはそれを持っていない者は神の呪いと怒りの下にいるような信仰のことを意味し、罪の赦しの感覚は、私の罪は赦されたという、また別の明白な確証のことを意味するとして義認と確証を分けて考え始めている⁷⁹。そしてウエスレーは、「義認の信仰がそのような確証であること、あるいは、共に両者が必然的に結合していること、を認めることはできない」⁸⁰と、自己修正しているのである。その理由として、ウエスレーは、「もしも、義認の信仰が赦しの明白な感覚であったなら、それを持っていない人はみな、神の呪いと怒りの下にいることとなってしまう」⁸¹。という点をあげている。それはウエスレーの牧会的配慮を窺わせるものである。ウエスレーは、「私たちが赦しを受けることの意味が、どうして私た

⁷⁵ *ibid.*, Yates, p.67.

⁷⁶ *ibid.*

⁷⁷ *ibid.*, Yates, pp.67–68.

⁷⁸ *ibid.*

⁷⁹ *ibid.*, Yates, pp.67–68.

⁸⁰ *ibid.*

⁸¹ *ibid.*, Yates, p.68.

⁷¹ Thomas Jackson, *The Works of the Rev. John Wesley, M.A.*, London, Mason, 1829–1831, Volume VIII, p.276.

⁷² *ibid.*

⁷³ *ibid.*, Yates, p.65.

⁷⁴ *ibid.*

ちが赦しを受ける条件自体になることができるのか？」という点もあげている⁸²。確証は救いの条件ではないことにこの時ウェスレーは神学的にも気がついていた、といえると思う。

メソジスト・リバイバルから 8 年目に書かれたこの弟・チャールズへ宛てた手紙には、ウェスレー兄弟が 1500 人の確証体験を得ている人々を知っていることが書かれ、しかしだからといって、その人々が確証体験を受けるまでは義認されていなかったということを証明しない、というウェスレーの記述に出会う⁸³。それは確証体験を得ている 1500 人のメソジストの中には、確証体験を得る以前にすでに義認の信仰を持っていた者がいた、という、義認と確証の両者の同時発生を否定する可能性を示唆するものである。1747 年のメソジスト年会以後、ウェスレーは神学的な考察を重ねて、神の行為である義認と確証で体験する赦しの感覚を必然的に同時に起こることとする、というモラヴィア派的な教理を正式に避けた、不可分性を避けた、ということがいえると思う。それは、アルダスゲイト体験から 9 年と 2 ヶ月目のことであった⁸⁴。しかしこの判断は、ウェスレー自身の個人的なアルダスゲイト体験における義認と確証の不可分性を否定するものではない。この判断は一般

的な教義上のことであり、他の信徒における聖霊の働きの多様性を認めつつ、メソジストを指導する上での牧会的配慮であったと思われる。確証体験のない信徒は絶対に救われない、という極端な神学的帰結を避けたのであろう。

2. 聖霊体験の多様性と豊かさ

—マドックスとコリンズの往復論争に触れて—

劇的な回心体験としてのアルダスゲイト体験の解釈を巡って、**Methodist History** の誌上で 1991 年 1 月から 1992 年 10 月に行われたケニス・J・コリンズとランディー・L・マドックスの往復論争の中心点は、後期ウェスレーが神の僕の信仰の段階の人々に、つまり、アルダスゲイト体験以前に、義認の信仰を認めていたかどうか、であった⁸⁵。アルダスゲイト体験以前に一体いつ・どこでウェスレーは義認の信仰を得る体験をしたのか、とコリンズはマドックスに質問をしている⁸⁶。質問に対してマドックスは漸進的に義認の信仰を得ているということを劇的なアルダスゲイト回心体験のように特定するのは不可能である（それがまさに漸進的に得られているということの特徴でもあると主張する）、そしてそのようなコリンズの質問は不適切である、と答えている⁸⁷。二人の往復論争はそれぞれの義認についての考えの土台がまるで違うので噛み合わない。コリンズはウェスレー自身の個人的なオリジナルなアルダスゲイト体験を中心に義認を論じ、マドックスは後期ウェスレーの思想の変化に基づいて、東方の霊的な義認概念をもその考察に恐らく含め始めて論じているのである。

しかしウェスレー個人のアルダスゲイトで起こった経験は確証の教理という視点から見ると、コリンズが主張するように起こったものではないだろうか。しかもそれは、西方的で、極めてプロテスタント的な性格を持つ信仰義認の体験であったといえるのではないか。ウェスレーのアルダスゲイト体験

⁸⁵ Randy L. Maddox, "Continuing the Conversation," *Methodist History* 30:4(July 1992), Madison NJ, The United Methodist Church, p.239.

⁸⁶ *ibid.*, Collins, p.23.

⁸⁷ *ibid.*, Maddox, p.241.

⁸² *ibid.*

⁸³ Frank Baker, *The Works of John Wesley, Volume 26, London, Clarendon Press Oxford 1982, p.255.*

⁸⁴ *ibid.*, Yates, p.61. 救いの確証が信仰の本質ではないことにウェスレーが個人的なレベルで気がついたのは早く、1738 年 9 月 28 日のアーサー・ベッドフォード牧師宛ての手紙の中においてであったことが、イエイツによって指摘されている。それはモラヴィア兄弟団訪問のためのドイツ旅行から帰ってから 12 日後であった。岩本助成氏も、「オールダースゲイト再考」『ウェスレー・メソジスト研究』5 (教文館、2004) 20 頁においてイエイツと同様の指摘をしている。岩本氏によると、ベッドフォードへの手紙は「この確信というものは、ある人には、より小さな程度で、他の人々にはより大きな程度で、ある人々には瞬間的に、他の人々にはずっと後になってから、神の御心に従って与えられるものです。しかし、確信は全ての人々に約束されているものですから、それを熱心に求めるかぎり、全ての人々に必ず与えられると信じて疑いません。」と、訳せる。これは名訳で、岩本氏は上記の論文の 20 頁において、「聖霊なる神の御働きは多様なのであって、ある種の信仰理解や確信体験を絶対化したり、他の人々のそれと比較したり、ましてや、互いの恵みの経験の真偽を論じたりすることは厳に慎むべきことである。」と主張している。私はこの主張を全面的に支持している。イエイツと岩本氏の考察に同意する。

は神の義認の行為と新生、そして聖化と救いの確証の四つが同時に起こった出来事（広義的な回心体験：四つのうちどれ一つも欠けない、という意味において）であったと思われる。ドラマチックに伝記などで描かれてきたのにはそれなりの深い霊的な根拠があったのだと思う。それは、ルター派のモラヴィア兄弟団の影響の下で起こった、義認、新生、聖化、確証の四つが濃縮された一つの体験であった。オリジナルは極めてプロテスタント的であり、しかも劇的であった。それは善い行いによって人間は救われるのではなく、キリストへの義認の信仰のみによって救われる、そしてそれは聖霊によって救いが個人的に確証され、体験できるものである、というものであった。それは、アルダスゲイト体験以前にウエスレーが直面していた救いの確証を求めていた魂の葛藤への答えでもあったのだと思われる。ウエスレーは義認の信仰を与えられ、現時点における救いの確証を体験することができた、と理解したい。

ところが、ウエスレーはメソジスト運動の指導者として教義的にも牧会的にも自己の体験を再検討しなければならなかった。個人の聖霊体験はすべての人々には当てはまらない、という聖霊の多様性と豊かさという恵みの事実、ウエスレーは直面したのである。その結果、神の僕の信仰の段階の人々への、つまり、アルダスゲイト体験以前の自己の信仰的な状態への神学的洞察と牧会的な配慮とが出てきたのである。具体的には、アルダスゲイト以前の神の僕の信仰は神によって受け入れられている⁸⁸、という表現を用いて、牧会的な配慮を残した、ということである。この配慮は後期ウエスレーに現れる特徴の一つではないだろうか。マドックスはこの「神を恐れる者は、…受け入れられている (one who feared God, …, is accepted of him.)」⁸⁹ というウエスレーの表現をもって、それは義認の信仰を漸進的に授与されている状態であるとウエスレーは思想を発展させた、と、拡大気味な解釈をしているのではないだろうか。

結論

⁸⁸ Albert C. Outler, *The Works of John Wesley*, Volume 3, Sermons III(71–114), Sermon 106 “On Faith”, Nashville, Abingdon Press 1986, p.497.

⁸⁹ *ibid.*

ウエスレーの確証の教理は、ローマの信徒への手紙 8章 16節を根拠にした、メソジスト・リバイバル運動を生み出した、極めて伝道的な共同の証しについての教えである。共同の証しとは神の霊の証しが私たちの霊の証しと共に証しをする、という形をとる。ウエスレーは神の霊の証しを、罪の赦し、神の子供としての受容、永遠の命の約束、神の愛の私たちの魂への注ぎによる新生、を含む義認的性格を持つ「直接的証し」と呼び、私たちの霊の証しを「間接的な証し」と呼んでいた。直接的な証しとは神の霊の私たちの魂への内的印象（霊的感化）のことであり、ウエスレーは目覚めさせられた霊的諸感覚によって、人間は直接的証しを認識できると信じていた。間接的証しとは、直接的証しが生み出す愛、喜び、平安など聖書に記されている全ての聖化の実のことを意味する。聖書の御言葉によって、共同の証しは自己検証される。聖書の御言葉に従わない証しは主観主義か熱狂主義である。共同の証しは聖書を通して互いに検証し合い、支え合うという性質を持つ。証しの自己検証において、信徒の体験が聖書の御言葉に先行することはない。ウエスレーはプロテスタントの聖書中心主義を確証の教理にも適応している。

ウエスレーの確証の教理は、その共同の証しを通して、ウエスレーのアルダスゲイト体験の意義を明白に指し示すものである。その意義とは、アルダスゲイト体験とは、義認、新生、聖化を含み、現時点における救いの確証を著しく深めた回心体験であったということである⁹⁰。しかし、ウエスレーのこの極めて個人的な回心体験のパターンは、全てのクリスチャンに適應するわけにはいかなかった。晩年のウエスレーは聖霊の働きの多様性と豊かさに気がついてきた。メソジストのリーダーとして聖霊体験を教義化しなければならなくなった時に、ウエスレーは必要な牧会的な配慮を払うことを躊躇し

⁹⁰ 岩本助成氏は、「オールドゲイト再考」『ウエスレー・メソジスト研究』5（教文館、2004）、6頁においてウエスレーの「回心」の概念の用い方について、それは「神への立ち帰り」の意味として、悔い改め、義認、信仰、確信、確証などを包括する「第18世紀イングランドにおいて理解されていた回心概念」として用いられていた可能性を指摘している。私もその点に同意する。岩本氏は、ウエスレーが「説教」や「日記」の中で「回心」という用語をあまり使っていない点や、ウエスレーの新約・旧約の「聖書注解」（2巻）の66巻中30巻以上の書物においても「回心」という用語が包括的概念として用いられていたことを指摘している。

なかった。特に、義認と確証の必然的な同時発生・不可分性の否定（赦されたという感覚自体は救いの条件とはならないことも含めて）、信仰と確証のそれぞれにおける段階の設定（弱い信仰は不信仰というモラヴィア派の考えの否定と信徒が追い求める通常の聖霊の賜物としての救いの確証の探求）など確証の教理に関わる事において、ウエスレーはメソジストの指導者として実践的・現実的な神学上の判断を下していったのである。そのような判断の多くはアルダスゲイト体験以後、継続的に行われ、後世のウエスレー研究者たちの間にアルダスゲイト体験の解釈について様々な論議を起こす要因になった。

そして忘れてはならないのは、そのオリジナルは極めてプロテスタント的なルター派教会のモラヴィアンの影響の下で起こった信仰義認の回心体験であった、ということである。アルダスゲイト体験がメソジストによって事実以上にすばらしい回心体験であったとされてきたことに、メソジスト内部から様々な批判が後世において出されてきたが、ウエスレーの確証の教理を細かく調べれば、オリジナルのアルダスゲイト体験の中で、聖霊がウエスレーになさった御業の意義はさらに大きく評価されなければならないことに気がつかされる。ウエスレーがアルダスゲイト体験で得たオリジナルの直接的な証しは、伝道的な証しとして注目する価値があるものである。

ウエスレーの次のような文章には感銘を覚える。これはウエスレーが、ウエスレーの確証の教理に厳しく批判し続けたジョン・スミスに **1745年9月28日**（アルダスゲイト体験から**7年後**）に書いた手紙の一文である。「私が誠に敬虔であると信じている、すぐに崩れてしまうような地盤の上に立っているのではない、自らの口によって神の愛が彼らの心に最初に注がれたその日と、神の霊が彼らの霊に彼らが神の子どもであることを最初に証しをしたその時を個人的に知っているところの、**1200** から **1300** 人の人々と、私は知り合いなのです。」⁹¹ 文中の「神の愛が彼らの心に最初に注がれたその日と、」や「神の霊が彼らの霊に彼らが神の子どもであることを最初に証しをしたその時を、」とは、ウエスレーのアルダスゲイト体験のような、瞬間的な救いの確証の体験を示唆していないだろうか。「私が誠に敬虔であると信じて

いる」とは、現在もその人々が生きていて、敬虔であり続けている、つまり、確証の教理で指摘したところの間接的な証し、聖化が実り続けている状態を意味していないだろうか。ここで、ウエスレーは実際にウエスレーのような救いの確証体験で、**1200** から **1300** 人の人々が義認され、新生され、聖化されていた事実を告げているのではないだろうか。

1747 年のチャールズへの手紙ではウエスレー型の確証経験を持たないメソジスト（確証よりも前に義認が起こっていた、義認と確証の不可分性が当てはまらないとウエスレーが推測する人々、つまり、マドックス型に該当する人々）を含めて **1500** 人の人々についての記述があったが、この **1500** 人から上記の **1745** 年のジョン・スミスへの手紙に言及されている **1200** から **1300** 人の明らかなウエスレー型の確証体験を持つ信徒の数を、大変乱暴なやり方ではあるが、単純に差し引くと、少なくとも約 **200** 人から **300** 人の信徒がウエスレー型ではない、義認が確証の前に起こっていたかもしれないメソジストあるいは知人であろうと推測できる。およそ、**1745** 年から **1747** 年におけるメソジスト運動の核となる中心的信徒たち（ウエスレーが個人的に名前まで知る人々）の **13%** から **20%** がウエスレー型の確証体験を持たない人々であったかもしれない。この率の低さには驚かされる。しかし、この **1-2** 割の信徒たちの存在こそが聖霊の働きの多様性と豊かさを示し、確証の教理上のウエスレーの牧会的配慮の要因となったといえるのではないだろうか。逆に言えば、ウエスレーの知人の **8、9** 割のメソジストはウエスレー型の救いの確証経験とバランスのとれた共同の証しを持っていた可能性がある。

どちらの型の確証経験であったとしても、**18** 世紀のメソジスト・リバイバル運動とは、確かにキリストの救いの生きた証しに支えられて発展した運動であった、といえるのではないだろうか。事実、共同の証しを持つメソジストたちの敬虔な信仰生活は聖霊の働きを世に示し、ウエスレーの確証の教理を実際に長い間支えていたのである。初期メソジストたちは伝道的な共同の証しを確かに内に持っていた集団であった、と結論できるのではないか。そしてその伝統は現代においても多くのメソジスト系諸教会において受け継がれているものと信じたい。アルダスゲイトは単なる確証だけの体験ではなく、義認、新生、聖化を含んだ救いの確証体験であり、神はそのように聖霊を通してウエスレーに証しをされ、その証し自体が実際にウエスレーを変え続け、

⁹¹ *ibid.*, Baker, Works, Volume 26, Letters II, p.158.

メソジスト・リバイバル運動のリーダーとしてあのように用いられたのであると思われる。

私たちキリスト者は、聖書に根拠付けられ、聖霊によって示され、神の愛の魂への注ぎから起こる、喜びに満ちたキリストの救いの証しをもって伝道していくことが大切であることを、ウエスレーの確証の教理から学ぶことができる。喜びを伴うバランスの取れた、どちらにも偏らない共同の証しこそが伝道的な証しとなりうる、と、ウエスレーは主張し続けているように思われる。ウエスレーの確証の教理は、伝道の現場ですでに応用され、メソジスト運動の中で実証済みであるから、とても安心である。それは二つの証しのバランスの中で熱狂主義を避け、敬虔な信仰生活を奨める教えであった。

キリストの救いを喜ぶ神の民・メソジストたちを支えた共同の証しが、日本にあるキリストの諸教会の信徒一人一人に与えられ、伝道がより前進することを強く望む次第である。

(日本基督教団・亀戸教会伝道師)